

歴史点描 14 大江神社

大江島は古くは、「生い島」と呼ばれ、河川に運ばれた土砂が堆積し出来た島が成長したと言われ、平安時代は藤原氏の荘園「大江嶋庄」、鎌倉時代には神護寺の荘園「福井庄」東保となり、天正15年「豊臣知行方目録」に初めて大江嶋村と記され、江戸時代初期は諸藩領、寛文12年より幕府直轄領となり明治にいたっています。

大江島の古くからの村の中心、路地の奥の家々に囲まれた地に、東に向かって立つ鳥居の右下に文久2年の銘のある玉垣があります。文久2年は全国的に麻疹・コレラが猛威をふるった年で、終息を願い奉納されたと思われます。鳥居を潜った約10メートル先の小さな赤い祠は、ほうそうさんと呼ばれ、『大江島物語』には明治の頃天然痘が流行したときに村の篤志家によって勧進されたと記されています。明治41年村内の稲荷神社・春日神社・金刀比羅宮が合祀され、明治45年「大江神社」と呼称統一されました。平成になって寄進された石の参道に沿って南へ折れ、本殿・拝殿を西へ仰ぐと、拝殿の前には左右に石の注縄柱、台座に狛犬が配されています。

境内に設置された姫路市教育委員会の説明によると、「社殿の棟札には明治39年上棟、本殿には享保5年作の神像一対と天保15年作の神像一対が祀られています。」

網干歴史講座会員 和木節子



大江神社



ほうそうさん